

Latest Stories

最新記事

アメリカ

戦場の日々を愛し過ぎて

戦地への赴任を繰り返し、家族に安らぎを見出せなくなった兵士たち

2009年7月22日（水）

ダニエル・ストーン、イブ・コナント（ワシントン支局）、
ジョン・バリー（軍事問題担当）

ショーン・マクブライド米陸軍2等軍曹（32）は、家にいるより戦闘地域にいるほうが快適だ。戦場で脳内に噴き出すアドレナリンや「誰かに撃たれるかもしれないという恐怖」が心地いいと言う。

子供を保育園に迎えに行ったりスーパーで食材を買ったりする家庭生活の細々した用事は好きでない。戦場から戻ったとき一番苦勞するのは、「ほかの人とうまくやっていくこと」だと言う。

アフガニスタンとイラクで任務に就いた期間は43カ月。アフガニスタンでイスラム原理主義勢力タリバンと戦っていたとき、当時の妻から離婚書類が送り付けられてきた。3年間の結婚生活が終わった。「いやはや」と言って、マクブライドは肩をすくめる。

現在はアメリカ国内の基地に戻り、離婚経験のある27歳のエバンジェリン（愛称「スター」）と再婚しているが、陸軍第101空挺師団の一員として、戦地への5度目の派遣が予定されている。

国外で任務に就いているとき一番恋しいのは何かと尋ねると、マクブライドはそこに妻がいるのもお構いなしに、改造して馬力をアップさせた愛車フォード・マスタングだと平気な顔で言う。この愛車をスピードを出して運転し、信号で隣に派手な車が止まったときは「どっちがホンモノか見せつけてやる」のだ。

もっとも、車の運転もイラクのほうが楽しい。「道で何の制約も受けない。道路の支配者になれる……それに、招かれてもいないのに他人の家に踏み込める。その家の所有者になった気分だ」

マクブライド2等軍曹は、兵士のなかの兵士だ。兵士の仕事を熟知し、それを何よりも愛している。米軍が有能な兵士をとりわけ必要としている今、マクブライドのような兵士が貴重な人材であることは間違いない。しかし若い男性が戦場を愛しすぎ、家庭生活で居心地悪く感じていいのだろうか。

ジェーソン・ダッジ陸軍曹長（36）は、そうした「戦場を愛し過ぎる兵士」の1人かもしれない。あらゆる面で極端な男だ。毎朝きっちり午前4時25分～28分の間に出勤し、その数時間後に朝のジョギングをする。大抵15～25キロくらい走る。9メートル余りのロープを自分の両腕だけでよじ登るのに、10秒もかからない。

自分がやるべき仕事はイラクにある

一番スムーズに仕事ができるのは直射日光の差し込まない暗い部屋の中。食事は1日1回しか取りたくない。「妻に言われて仕方なく、夕食だけは取る」と、ダッジは言う。軍での彼の役割は、戦地でドアや壁を爆破するための爆発物を準備することだ。

同僚は国内勤務の職に異動したり軍を辞めたりしているが、気にはならない。自分にはやるべき仕事があり、その仕事はイラクやアフガニスタンにあると、ダッジは思っている。

「私の作った爆薬の不具合が原因で命を落とした兵士はこれまで1人もいない……それが自分の最大の手柄だと思っている」と、ダッジは胸を張る。「私がいなければ誰かが代わりにこの仕事をするだろうが、私のほうがうまくできる自信がある」

戦闘地帯への派遣回数が増えるほど、心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症する危険性は高まる。陸軍が08年春に行った調査によると、3～4回の派遣経験を持つ下士官の27%がPTSDを発症していた。派遣経験1回の下士官だと、この割合は12%になる。

問題を軽くみるわけにはいかない。5月にはイラクのバグダッドで、軍のカウンセリング室を訪れた44歳の軍曹が銃を乱射し、同僚5人の命を奪った。3度目の派遣でイラクに来ていたこの男は数週間後に帰国の予定で、軍が自分をお払い箱にしようとしていると感じていたらしい。

ロバート・レークス陸軍上級准将（39）は、戦場が自分を変えたという自覚がある。国外派遣から戻るたび、どこか変わった感じがすると周囲から言われる。

テネシー州のキャンベル陸軍基地でレークスに話を聞いたときはまだ午前10時だったが、彼は疲れ切って見えた。「（アメリカ国内の基地で）ごく普通の

1日を終えたただけなのに、ぐったり疲れ果ててしまうことがある」と言う。「すぐに横になって眠りたくなる。昔はこんなことはなかった。年を取ったのかもしれない。戦争のせいだとは断言できない」

レークスがイラクで過ごした期間は、合計で52カ月。そのおかげで「18年続いた結婚生活が壊れてしまった」と言って、ぎこちない笑い声を上げた。「でも、私は命令どおり行動するだけだ。行けと言われた所に行くまでのこと。あまり深く考えていない」

レークスには、パメラ・ドスという38歳の婚約者がいる。ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）のフェースブックで知り合い、共通の趣味を通じて親しくなった。2人ともハーレー・ダビッドソンのオートバイをこよなく愛し、マシュマロを真っ黒に焼いて食べるのが好きだ。

家でもとっさに床に伏せようと

ドスは、レークスが今後も戦闘地域への赴任を繰り返すと承知の上で交際を始めた。けれど、本当は国内に腰を据えてほしいと願っている。「やっと最高の相手と巡り合えたのに、その男性を世界と共有しなくてはならないなんて」

本人が希望すれば、国外への派遣がない部署に異動することもできたはずだ。しかし、戦闘地帯への派遣を繰り返し望む兵士が往々にしてそうであるように、レークスには同僚に頼られているという自負がある。「私の代わりに務まる人間が部隊にいない。私には選択の余地がないんだ」

兵士たちをむしばむのは、派遣回数より派遣期間の長さなのかもしれない。陸軍の情報将校ジェシカ・オール（42）は、現在ノースカロライナ州のブラッグ基地に配属されているが、39カ月の戦闘地域への派遣経験を持つ。

国外への派遣が長期になると、普通の人生を送る上で支障が出てくる。「人生のあらゆることを保留にしなくてはならない。何一つ決められない」とオールは言う。

配偶者や恋人がいる身にはつらい。オールは、陸軍の別の旅団の情報将校と付き合っている。軍の訓練中に知り合い、06年に戦闘地域で数カ月だけ一緒に過ごしたが、その後は遠距離交際が続いた。2月からは一緒に過ごしているが、夏にはボーイフレンドが国外に派遣されてまた離れ離れになってしまうと、オールは言う。

マクブライド2等軍曹の妻スターは、夫のPTSDのような症状に気付いている。戦闘地帯から家に戻ってきてしばらくは、いつもピリピリした日々が続く。

スターが洗濯かごをうっかり床に落としたとき、マクブライドが取り乱したことがある。「(敵の銃撃から身を守ろうとするみたいに) 床に伏せようとして

いた」と、スターは言う。「3カ月たってようやく普通に戻った」

それでもマクブライド自身は、戦闘地帯への派遣が原因で精神を痛めつけられてなどいないと主張する。「助けが必要だと思えば、サポートを受けられる。2カ月に1回くらい、自殺予防の講習会もある」。もっとも、自殺は「弱い連中のやることだ」と言う。

これまでにカウンセリングを受けたことは？ 「1度もない。カウンセラーと1対1で会ったことはない」

スターが口を挟む。「カウンセリングを受けたほうがいいのよ。しっかり記事に書いておいて」

「いやはや」と、マクブライドが声を上げて笑った。

[2009年7月1日号掲載]